

栃木県北東部における敷石住居の出現と柄鏡形住居の受容

—那須塩原市槻沢遺跡の発掘調査成果を中心に—

ごとうしんすけ
後藤 信祐

はじめに

1. 敷石住居・柄鏡形住居出現等についての研究抄
2. 敷石住居出現以前の住居正中線上張出部

3. 敷石住居出現以前の部分敷石・床面石列

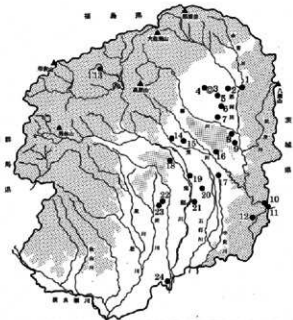
4. 栃木県北東部の敷石住居の出現と柄鏡形住居の受容
5. まとめ

敷石住居・柄鏡形住居は縄文時代中期後葉から後期前葉に中部地方から東北地方南部で確認されているが、両地域の関係を明らかにするには栃木県の様相、特に那珂川上流域の様相を明らかにすることが重要と考える。そこで那須塩原市槻沢遺跡を主に、栃木県北東部の中期後葉の住居正中線上の張出部、床面の部分敷石や石列を取り上げ、住居敷石の出現と柄鏡形住居の受容について再検討をおこなった。

その結果、部分敷石については複式炉の土器埋設部を中心とした敷石からの発展したものが後期前葉までであり、継続する拠点集落内では一時期1軒程度存在すると予想した。住居正中線上の張出部については、槻沢遺跡では中期後葉の複式炉住居の前庭部に多く検出され出入口部と考えられるものの、それ以降の住居では張出部が発達しないことから、中期末葉～後期前葉の柄鏡形(敷石)住居は、従来から言われてきたように関東地方西南部系譜の住居であることを確認した。また、栃木県北東部ではこのような柄鏡形(敷石)住居は、中期末～後期初頭の段階には継続集落から離れた地点に単独で検出される傾向があり、後期初頭～前葉には継続集落内に1軒営まれるもの、新たに配石遺構を伴う敷軒の柄鏡形(敷石)住居を含む集落が出現するなど多様なものと予想した。

はじめに

槻沢遺跡に集落が営まれた縄文時代中期中葉から後期前葉、栃木県北東部の那珂川やその支流の段丘上には多くの集落が展開し、縄文時代の中でも最も繁栄した時期として知られている。そして中期後葉以降晩期まで、堅穴住居内外の多く施設には石が多用されるようになる。時期や地域によって形態や石の選択・組み方は多少異なるものの、住居内の代表的な施設がそのほぼ中央に付設される炉である。なかでも東北地方南部を中心に分布する土器埋設部・石組部・前庭部で構成される中期後葉の複式炉はその頂点で、南縁に位置する栃木県北部でも同じ構成の複式炉が多くみられる⁽¹⁾。また、その終末には敷石住居が出現し、それ以降、集石や配石遺構、墓など屋外の施設にも石が多用されるようになる。



1 ハクテンヤ遺跡 2 長ヶ平遺跡 3 槻沢遺跡 4 月1遺跡 5 早刈下遺跡 6 平林真子遺跡 7 片野田宮土山遺跡 8 浄法寺遺跡 9 三輪神町遺跡 10 河原台遺跡 11 塩平遺跡 12 松の木遺跡 13 神内遺跡 14 広高遺跡 15 石塚遺跡 16 室ノ木A遺跡 17 長ノ平遺跡 18 古宮遺跡 19 藤山遺跡 20 上の原遺跡 21 竹下遺跡 22 柳川田遺跡 23 上欠遺跡 24 真倉遺跡

第1図 張出部付き住居・敷石住居関連遺跡位置図

住居内に石を用いた最大の遺構である敷石住居は、中期後葉から後期前葉に中部地方から東北地方南部まで確認されている。中部高地から関東地方西部の山地寄りの地域では柄鏡形敷石住居が顕著で、すでに中期後葉には確認されていることから、この地方で出現し、その後周辺に拡散していったものと考えられている。一方、東北地方南部では中期後葉には、土器埋設部・石組部・前底部で構成される複式炉が住居に設けられるようになり、初期のものは大型で石組部や埋設土器の周囲を縁石で囲い、間に石を敷き並べるなど精巧なものも多い。そして、中期末葉には福島県北部・宮城県南部・新潟県北部で複式炉を中心とした敷石住居が認められ、後期前葉には柄鏡形敷石住居もみられるようになる。この二つの地域の敷石住居・柄鏡形住居の関係については、西関東からの伝播、それぞれの地域での発生といった異なる二つの意見が提出されている。

この間に位置する栃木県北東部の那珂川上流域は、いつの時代も関東と東北を結ぶ内陸の大動脈であり、両者の関係を解明には重要な地域と考えられる⁽²⁾。ここでは那須野が原扇状地の扇央部に位置する那須塩原市槻沢遺跡を中心に、中期後葉の住居正中線上の張出部、部分敷石や石列など関連する施設について検討し、栃木県北東部の敷石住居・柄鏡形住居の出現と受容について私見を述べてみたい。

1. 敷石住居・柄鏡形住居出現等についての研究抄

大正14年(1924)に東京都町田市高ヶ坂遺跡で敷石住居が初めて発見されてから、あと数年で100年を迎える。今日まで甲信から関東地方西部を中心に敷石住居・柄鏡形住居の時期や分布、地域性や性格など多くの研究が提出されている。ここでは柄鏡形住居、敷石住居の出現を中心に、中部から関東地方西部と東北地方南部の研究の現状について、管見ではあるが把握しておきたい。

まず、全国的集成を行い敷石住居・柄鏡形住居研究の第一人者である山本暉久は、柄鏡形(敷石)住居は関東地方西部・中部山地・伊豆半島を中心に分布し、中部山地や西関東の山地寄りの地域では床面敷石が顕著で、関東でも下末吉・武蔵野・大宮台地、東京湾東岸の千葉県域では部分敷石や敷石をもたない柄鏡形住居が優勢であることを指摘している。そして敷石については中期後半段階に現れた住居奥壁部の石柱・石壇に、張出部については出入口に設置された埋壘を中心とする小張出にそれぞれの初源を求めた。

また、土器埋設部・石組部・前底部からなる複式炉構造が、柄鏡形(敷石)住居の埋壘と敷石を伴う張出部と共通性があるとし、東南部の複式炉に付随して敷石された住居の成立については、複式炉を発達させた大木式土器文化圏内の集団が柄鏡形態・構造の受容は否定しつつ、選択的・排他的に敷石風習のみ受容した可能性を指摘している(山本2000)。

さらに、関東南西部～山梨・長野県域の集落が、期終末に住居は柄鏡形(敷石)住居へと変質しつつ集落の継続を絶つ傾向があることを指摘し、柄鏡形(敷石)住居が多数の竪穴住居群の中に単独ないし少数出現するのではなく、一気に柄鏡形住居へ変化を遂げていることから、それまで強固に規制を続けてきた集落構造(環状集落)の崩壊と捉えている。そして、柄鏡形(敷石)住居の性格については、特殊な家屋・施設ではなく、出現過程から一般的な住居であることを強調している。(山本2012)

石井寛は明確な張出部を有する住居址は、加曾利EⅢ式古段階に神奈川西部や山梨県笹子峠東側でやや目立つほか、利根川上流域や長野県・山梨県にまばらに存在し、加曾利EⅣ時期には神奈川東部から下総台地など関東東部地域へ拡散したとしている。一方、張出部が不明瞭な敷石住居址(部分敷石が大半)は千曲川・犀川といった中部高地を中心に検出されていることを指摘している。

敷石行為については、加曾利EⅢ式古段階に張出部・主体部入口部埋壘周辺(中部高地を中心とした埋壘上への石蓋との関連)・炉址周辺・奥壁部周辺・壁際を巡る周壁型(柱穴際の礫の配置)などの主軸と関連する部位にあり、これらが組み合わせりながら顕現していったとしている。また、張出部については、

方形小張出付住居から円形5本プラン住居を介することにより初期柄鏡形住居への変遷は可能とするが、明瞭な張出部は埋壘上の石蓋や埋壘周囲の部分敷石など入口部への精神性付与の高まりと関連しながら成立し、住居構造に関わる諸要素も加味しながら発達・展開したとしている(石井1998)。

本橋恵美子は、中期後半の出入口部に設置された埋壘を中心とした小張出が柄鏡形(敷石)住居の張出部の祖源とする山本暉久の考えに対し、小張出に埋壘をもつ潮見台型住居址の出現と柄鏡形住居の出現には空白期があること、分布についても重ならないことから、潮見台型住居址は柄鏡形出現前の住居形態で、柄鏡形住居とは別の住居形態としている。そして、柄鏡形住居については加曾利E3新式期に南関東で出現した住居形態であり、加曾利E4式期に一挙に中部地方から東北部まで広まったとしている。(本橋2017)。

一方、東北地方南部の敷石住居・柄鏡形住居については、鈴鹿良一が福島県の最も古い敷石住居は大木10式中段階であり、関東地方の加曾利E式土器分布圏からの影響によって成立したとしながらも、複式が有する住居で在地性が強いことから、成立時の背景の相違を指摘している(鈴鹿1986)。また、敷石住居が住居の部分敷石の場合、関東の方は壁際の近いほうに、福島・宮城県のはがを中心に広がっている傾向があることから発生が異なる可能性があること、柄鏡(張出部)については関東からの影響で、福島には時期的に少し遅れてくるという考えを示している(三春町教委1989)。

筆者も那須塩原市槻沢遺跡と那須町ハクテンヤ遺跡の発掘調査で敷石住居を調査し、那須地方の敷石住居は中期後葉以降の複式がの火に対する儀礼からがの周辺に敷石を施す那須地方独自のものと、関東地方西部で生成し後期初頭以降に伝播した壁際まで敷石を施す柄鏡形住居の系譜の異なる二者が存在したとする見解を示した(後藤2010b)。

塚本師也は栃木県内の大規模集落の消長から、阿玉台1b式から加曾利E式で完結する遺跡よりも、堀之内2式・加曾利B1式、もしくは晩期中後葉まで存続する遺跡が2倍あるとし、中期末葉で集落が断絶する関東地方南西部と様相が異なることを指摘している⁽⁹⁾。そして、栃木県では中期終末に集落の断絶・分散・小規模化が起こってないことから、本県の柄鏡形(敷石)住居の出現背景には別の要因を考える必要性を説き、中部から西関東に系譜が求められる遺構・遺物のなかの祭祀的なものに注目し、これらの屋内祭祀とともに受容された可能性を指摘している(塚本2018)。

また近年、具体例は示していないが、太田圭は栃木県北部から福島県南部が中期後葉段階に在地的な敷石行為が発達していたことが、その後西南東を中心とする典型的な住居内敷石行為や柄鏡形住居を受容する素地となった可能性が高いとしている(太田2019)。

以上、甲信〜西関東、東北部、本県の敷石住居・柄鏡形住居の出現や甲信〜西関東、東南部の関係など各研究者の意見を記してきた。このような状況を理解したうえで、栃木県の北東部の縄文中期後葉の住居正中線の張出部と床面敷石について検討していきたい。

2. 敷石住居出現以前の住居正中線上張出部

敷石住居出現以前の住居正中線上に張出部を持つ事例について、槻沢遺跡(海老原1980・後藤1996)を中心に見ていきたい。このような住居は中期後葉に多く確認されており、付設されるがは例外的に埋壘があるものの、ほとんどが複式である。複式がの中軸線は住居の正中線に一致し、柱穴はこれを基軸として対称的に配置されているものが多い。また、がの前庭部は壁まで続く浅い掘り込みが殆どであり、槻沢遺跡をはじめ那須地方のものは踏みめにより硬化が顕著なものが少なくない。

前庭部が壁外へU字状に張出すものは、SI-13・27・151・153・157a・157b・160、S52・8H・9H(第2図①〜⑨)などがある⁽⁴⁾。ほとんどが加曾利EⅡ新〜EⅢ式期のものである。張出部の半分が調査区外

となるが、前庭部が壁外へ大きく張り出す SI-157b・160 (第2図①・②)は、石組部と前庭部からなる大形の初期複式炉で加曾利 E Ⅱ 式段階あることは注目される⁽⁵⁾。なお、この時期以降、SI-10 (第2図⑩)・21 (第3図⑤)・24・48・120 (第2図⑫)・154・155 (第2図⑬)・S 52-2H・18H など複式炉前庭部の壁が外側にわずかに湾曲するものも多く、SI-09・34・111 (第2図⑭～⑯) など中期末～後期初頭まで見られる。対ピットが付設されるものも少なくなく、ほかの部分に出入口施設が認められないことから、前庭部が出入口部と考える要因となっている。

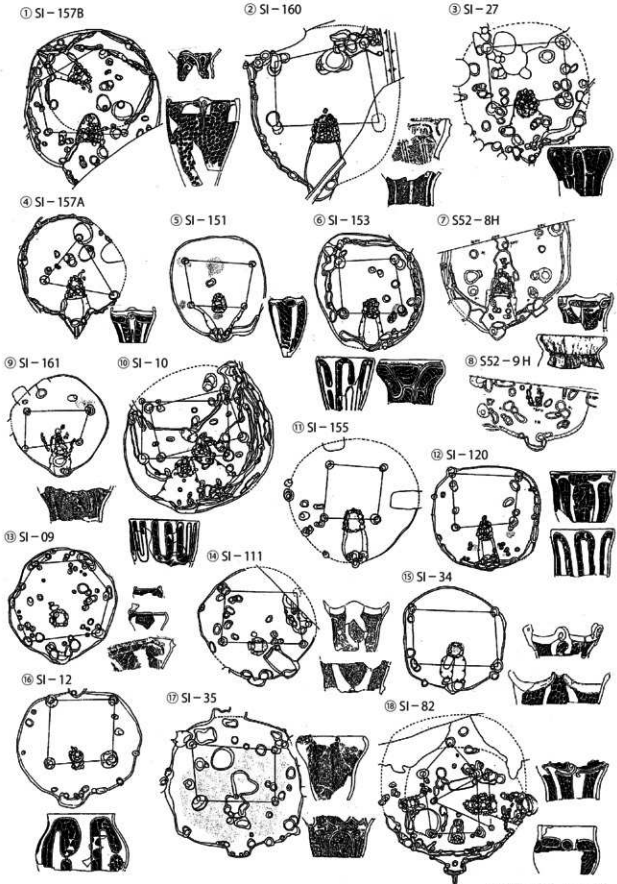
一方、コの字状の張出部をもつものは、SI-12・35・82a・82b の4軒で確認されている。SI-12 (第2図⑩)は胴部下半を欠く大型の太木9式の深鉢形土器を逆位に埋設した石敷埋設炉で、周囲に部分敷石を施している。視沢遺跡ではこの時期の炉は SI-12 以外すべて複式炉であり、複式炉住居の U 字状張出部と異なりコの字状で浅い掘り込みと対ピットが検出されており興味深い⁽⁶⁾。なお、この住居跡の炉の位置は複式炉の土器埋設部とほぼほぼ同じ位置にあり、柱穴の配置もこの時期の複式炉住居同様、前面の柱穴が炉を挟んで対峙する4本主柱である。SI-82 (第2図⑮)は建て替えが予想される住居で、新旧いずれの住居跡の張出部にも溝が巡る。古いほうの SI-82b の張出部中央には後述する横穴と思われ40cmほど溝が延びている。新しいほうの SI-82a は、土器埋設複式炉で、時期は加曾利 E Ⅲ 式(太木9式新段階)である。SI-35 (第2図⑰)も埋設土器以外の石がすべて抜かれているが視沢型土器埋設複式炉で、複式炉の中軸線上に対ピットのある張出部をもつ同様の形態の住居である。時期は加曾利 E Ⅳ 式(太木10式古段階)である。

視沢遺跡以外の栃木県北東部では、柄鏡形(敷石)住居出現以前の張出部をもつ住居は現在のところ、大田原市片府田富士山遺跡 SI-14 (第4図②、水野 2012)、矢板市広表遺跡 SI-02 (第4図⑥、海老原 1999) などがある。ほかに壁が明確でないが、前庭部がやや長く先端が丸く収束する那須町ハケットンヤ遺跡 SI-09 (後藤 2007)、片府田富士山遺跡 SI-17 (第2図④)、視沢遺跡 SI-71 なども壁外張出の前庭部の可能性がある。いずれも炉は複式炉で、加曾利 E Ⅱ 新～E Ⅲ 式段階のものである。

このほか県内で中期の住居で張出部が確認できたのは、高根沢町上原遺跡 JT-5 号跡(第4図⑤、青木 1981)と茂木町軽の木遺跡 A 4 住居(中村 2005)の2例である。前者は前面に浅い掘り込みを有する石囲い炉で、張出部は中央が窪んでおり、加曾利 E Ⅲ 式期である。後者は、土坑と重複するなど遺存状況が悪く張出部も不明瞭であるが、炉は石囲い炉で加曾利 E Ⅱ 式期である。

また、炉の中軸線上の前庭部壁に口径30cm前後で深さ50～100cmの柱穴状の横穴を掘る例が、視沢遺跡 SI-45・64・65・80・82b・90・117・127・157A (第2図④・⑧、第3図①・②・⑧)で確認されている。炉は住居や土坑との重複、炉石の取り壊しなどで明確でないものが少なくないが、ほとんどが石組複式炉で石組部からハの字に開く浅い掘り込みの前庭部が壁に接続する。類例是那須町ハケットンヤ遺跡 SI-14 (第4図②)、大田原市片府田富士山遺跡 SI-04・19 (第4図①・③)、矢板市広表遺跡 SI-02 (第4図⑥)で検出されている。片府田富士山遺跡は石組複式炉で加曾利 E Ⅱ 式新段階、ハケットンヤ遺跡・広表遺跡は土器埋設複式炉でやや新しい加曾利 E Ⅲ 式期である⁽⁷⁾。視沢遺跡 SI-117 (第3図②)は石組部からハの字開いた前庭部が収束しコの字に張り出して壁に接続している珍しい例である。片府田富士山遺跡 SI-04 も炉の作り替えとされているが、同形態のものかもしれない。

なお、この横穴の性格については、対ピットがあることからこの部分が出入口で、その施設の一部と考えることが妥当である。しかし、規模が対ピットより大きく主柱穴ほどの規模があり疑問が残る。前庭部の他の施設としては埋設があるが、視沢遺跡では前庭部で埋設が検出されたのは前庭部に張出部をもたない SI-20 のみである。口径35cm深さ45cmの柱穴状のピットの底に胴部下半を欠く深鉢を埋設している(第3図④)。竪穴と横穴の違いはあるが規模や形態は酷似しており、柱穴というよりは埋設のような特別な



住居跡 1/150 土器 1/16

第2図 櫛沢遺跡の張出部付き住居

ものを入れた穴と考えられないであろうか。

複式炉の前庭部の埋塞については、槻沢遺跡 SI-20 のほかには日光市仲内遺跡 SI-701 (片根 2006) があるのみである。また、中期末葉の石囲い炉・地床炉の段階には片野田富士山遺跡 SI-20、那珂川町三輪仲町遺跡 SI-034 (塚原 1994)、那須烏山市室の木 A 遺跡 SI-1 (木下 1993)、松の木遺跡 A10 住などで検出されているが、張出部を持つ住居では検出例がない。栃木県北東部ではこの時期、石囲い炉住居となるが、炉は中心より出入口側に寄っており、ほぼ複式炉の土器埋設部に位置するものが多い。主柱穴も炉を挟んで 2 本、奥壁側にこれに対応する 2 本が位置する 4 本主柱で、住居の中軸に対し横長の長方形の複式炉住居の配置のものが少なくない。埋塞は炉の前面壁際に位置するが、槻沢遺跡 SI-20 (第 3 図④)、片野田富士山遺跡 SI-20、三輪仲町遺跡 SI-034、松の木遺跡 A10 住など前庭部の範囲に入るものの、炉の中軸線からは若干ずれるものも少なくない。

住居の正中線の張出部については、槻沢遺跡では初期複式炉である石組複式炉の段階(加曾利 E II 式段階)に前庭部壁外へ U 字状の張出部が確認できる。この前の段階については槻沢遺跡では住居跡が確認されていないことから明確ではない。また、この張出部が槻沢遺跡特有なものか、槻沢型複式炉の分布圏まで広がるかについても、この時期の複式炉住居の検出例が少なく明確ではない。つぎの加曾利 E III 式段階になると、コの字状の張出部や僅かに張り出すものなど、栃木県北東部の複式炉住居には多くみられる。しかし、中期末葉の加曾利 E IV 式段階には、SI-35 (第 2 図⑩)の複式炉住居で確認されているものの、栃木県北東部では石囲い炉住居に変化し、張出部や対ビット・横穴などは殆ど認められないのが現状である。

中期末から後期前葉の張出部をもつ住居跡については、槻沢遺跡では F 区 SI-07 (第 5 図、中期末～後期初頭、後藤 1995)があるのみである。敷石住居を除くと県内でも宇都宮市御城田遺跡 SI-68 (第 4 図⑨、綱取 1 式、芹澤 1985)、塙平遺跡 2 次 SI-01 (第 4 図⑨、綱取 2 式、川原 1995)、矢板市石間遺跡 2 号住居(第 4 図⑩、堀之内 2 式、海老原 1979)、小山市横倉遺跡 SI-76 (堀之内 2 式、江原 2016)のみで、調査面積にもよるが現状では複数軒検出されている遺跡はない。いずれも柱穴は壁柱穴で、張出部に対ビットのあるもの、溝状ビットなどが認められる。張出部に埋塞など他の施設は認められないが、中期後葉の張出部をもつ複式炉住居などとは構造が異なり、空白期もあることから、これらは南関東系諸の柄鏡形住居と考えられる。

3. 住居床面の部分敷石・床面石列

槻沢遺跡では敷石住居跡が SI-37・38・62 (第 5 図)の 3 軒検出されている。掘り込みが浅く遺構の重複が激しいことから遺存状況は悪いが、SI-62 が土器埋設複式炉で、埋設土器から中期末葉(大木 10 式中段階)と考えられる。SI-37・38 が石囲い炉で、SI-38 が後期初頭、SI-37 が後期前葉で、各時期 1 軒確認されている。ここではこれらの敷石住居以前の、床面に石を敷く(部分敷石)・並べる(石列)・立てる(立石)・置く(丸石)といった行為が窺える住居跡を取り上げ、敷石住居の遡源になりうるかを検討してみた(表 1)。

まず、床に石を敷く(部分敷石)行為については、炉の作り替えによるものと、炉以外の床の一部に敷くものがある。炉の作り替えによるものは、旧炉の縁石など床面ラインから上に出る炉構築材を取り除き、構築材を平らにし床面とするもので、被熱で再利用できない埋設土器、石組部の敷石は残しているものが少なくない。SI-19・21・23・50・75・156 (第 3 図③・⑤・⑨～⑪)などで、炉を前庭部側にずらして作り変えるものに多く、旧炉埋設土器の下部を円筒状に残し、その上に石組部の縁石・奥壁などの大きな石材を置き、周辺に割石など小さな石材を敷いている。再利用ができない旧炉の構築材を用いるため、若干凹凸が見られ、これは建て替えによる床面補修と考えられる。また、SI-20 (第 3 図②)では複式炉の石



第3図 概況遺跡の張出部横穴・部分敷石をもつ住居等

組部前面に平石を敷いているものがあるが、平石を剥がすとピットがあり、旧住居の柱穴を塞ぐための床面補修と考えられる。

炉の作り替えなどの床面補修ではなく、炉の埋設土器の周囲に敷石を行うものに、SI-07・12・82A、S52・2H・16Hがある。SI-12・82A、S52・2H・16Hは大木9式新段階で、SI-82A(第2図⑧)は土器埋設部から石組部にかけての緑石の周囲に拳大の礫を二重に敷き並べている。SI-12(第2図⑨)は前節でもふれたが、埋設炉の周囲に部分敷石を施している。酷似するものは宇都宮市御城田遺跡63号住居跡(第4図⑫)がある。胴部下半を欠く口縁部が直線的に開く大型の鉢を逆位に埋設し、周囲に石囲いを施し、東側に薄い板石を一列敷いている。SI-07(第2図⑥)は複式炉の土器埋設部から石組部にかけて楕円形の平石などを一列敷いたもので、時期は大木10式古段階である。

SI-07と同様の敷石は那須町ハケットンヤ遺跡SI-11(第4図⑬)がある。直径4mの円形プランで、柱穴は本地域の複式炉住居と同じ4本主柱であるが、いずれも壁に接しており後出的である。奥の緑石周囲に楕円形の平石を敷いた方形の石囲い炉で、石囲い炉の幅で壁まで前庭部の浅い掘り込みが確認された。前庭部側の緑石が一段低く、奥壁側の炉床が焼土化しており、複式炉の残影がみられる。敷石下には深鉢形土器の胴部を輪切り状にした埋設土器が確認され、最終段階の土器埋設複式炉から石囲い炉への変遷が窺える好例である。前述の複式炉の作り替えと異なり、敷石は旧炉構築材ではなく敷石のための楕円形の平石を使用していることが注目される。時期は埋設土器から中期末葉大木10式中段階と考えられる。東側に近接して方形の石囲い炉の周囲に大形の板石と扁平な礫を敷いた敷石住居SI-08(第4図⑭)が検出されている。敷石上からは中期末～後期前葉の小破片が出土しており、槻沢遺跡例から判断して後期初頭から前葉と考えられる。

なお、方形の石囲い炉の周囲に部分敷石を施す例は、那珂川町浄法寺遺跡10号住居(第4図⑮)、塚本1997)と三輪仲町遺跡SI-37(第4図⑯)でも確認されている。どちらも一辺一石の方形石囲い炉で、前者は周囲3辺に径20～30cmの礫を巡らす程度である。炉の検出のみで時期不明であるが、炉の形態から中期末～後期初頭であることは間違えない。後者は南と西側の2辺を失っているが、北半周囲に拳大の礫を敷いている。奥壁側の炉床が焼土化していることから南側が焚口と想定され、これも複式炉の残影がみられる。時期は加曾利EⅣ式期である。このように、那須地方では炉の周囲の部分敷石の住居は、炉の周囲に一列の敷石を除くと各遺跡一時期1軒で、現在のところ複数軒検出されている遺跡はない。

炉周辺以外の床面部分敷石は、槻沢遺跡ではSI-23、SI-31B、S52-13Hがある。いずれも1m前後の略円形の浅い掘方に、平石や楕円形の扁平礫などを平坦に敷いている。SI-23(第3図⑩)は両耳壺を埋設土器とした複式炉で、旧炉埋設土器上に石皿を敷いている。土坑により壊れているが土器埋設部に近接して平石4個を敷いた部分敷石がみられる。SI-23が大木10式古段階、SI-31B(第3図⑪)・S52-13Hはこれより1段階新しい。なお、槻沢遺跡以外では、那珂川町三輪仲町遺跡第8次調査SI-12の土器敷石組炉の前面で部分敷石が検出されている。報告書未刊のため詳細は不明であるが、加曾利EⅡ式期で稀有な例である(眞保1998)。

つぎに、床面石列の住居について見ていく。槻沢遺跡ではSI-01・19・50・52A・115・161、S52-16Haで確認されている。SI-50(第3図③)はコの字状、SI-161(第2図⑨)はハの字状の石列で、溝を掘って5～10cmほどの小石を充填している。いずれも炉の周辺で確認されており、炉を意識した石列である。このほかの住居も炉の周辺で検出されているが、溝と数個の石が残る程度で形状は不明である。SI-19(第3図⑩)がやや新しいが、大木9式新段階に多くみられる。

周辺地域では那須塩原市草刈道下遺跡炉跡(長山2013)、大田原市長者ヶ平遺跡SI-2(第4図⑧、海老原2002)と那須町ハケットンヤ遺跡SI-14(第4図⑦)で検出されている。草刈道下遺跡の炉跡は、1941



住居跡 1/150 炉跡 1/60 土器 1/16

第4図 栃木県北東部の部分散石・張出部をもつ住居

年の発掘調査で検出されたもので(八幡 1941)、写真と発掘所見などから長山が再吟味を行っている。それによると、炉は概型石組複式炉で、前面に10cmほどの大きさの川原石が弧状に並べられていたようである。後二例は、住居中央の硬化が顕著な床面のアマーバ状の亀裂に小礫を埋め込んだものである。概型遺跡の溝を掘って石を詰めていく石列とは石の大きさも異なり、その性格も異なるものかもしれない。海老原部雄は「内区床面踏みしめに伴う亀裂損傷の補修整備」(海老原 2002)としているが、概型遺跡では、SI-56・58などの中期末葉の方形石囲い炉の住居の硬化床面に亀裂があったが、小礫の充填は行われていない。長者ヶ平遺跡 SI-2 の炉は調査区外のため明らかでないが、覆土中の遺物から概型遺跡やハケットンヤ遺跡よりは一段階遅い加曾利 E Ⅲ式期と考えられる。このような石列は、加曾利 E Ⅲ式期を中心に一部加曾利 E Ⅳ式までの複式炉住居に見られるが、周辺地域を含めてもこの3遺跡以外に検出例がないことから、ごく短期間的那須地方特有のものであったと考えられる。

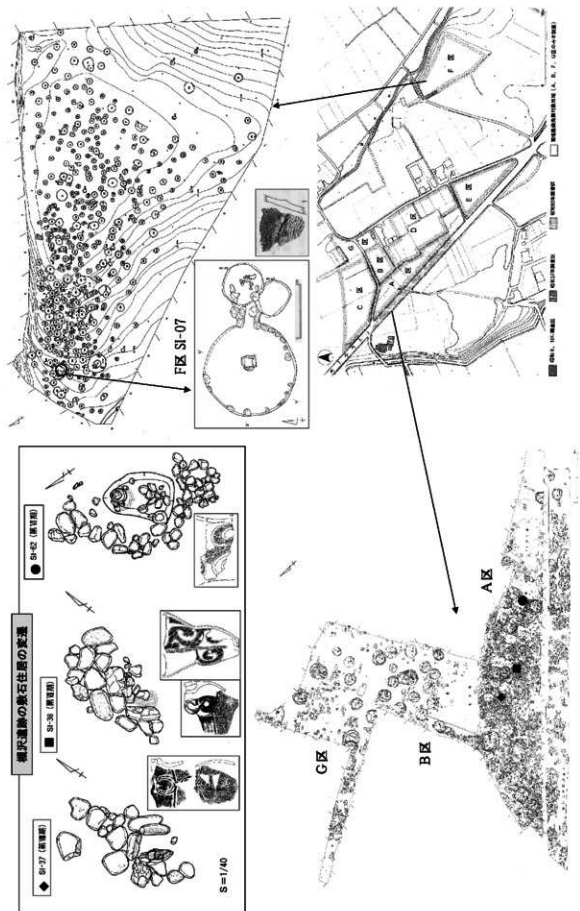
立石は SI-10・65・161 (第2図⑨・⑩、第3図⑧)で検出されている。いずれも炉の先端に位置し、細長い大形の自然礫を立てて設置している。加曾利 E Ⅱ新～E Ⅲ式期の住居で、次期の住居には認められない。丸石は、SI-11・120・154、S52-2H の床面から検出されている。壁際や主柱穴際からの出土が多く、SI-154を除き倒置深鉢が出土している(後藤 2009 b)。県内では宇都宮市上久遺跡 SI-53 (岩淵 1985)で丸石と倒置深鉢の併存例がある。

なお、丸石と立石の併存事例として SX-25 (第3図⑨)がある。直径40cmの大きな丸石と長さ40cmの正立状態の柱状礫が2mの間隔で出土している。環状に巡る住居群の内側の堅穴住居のない場所で、打製石斧と土器片が数点出土しているのみで時期の決定は難しいが、時期は中期後葉と考えられる。

4. 栃木県北東部の敷石住居の出現と柄鏡形住居の受容

概型遺跡では、大木10式期、称名寺式期、堀之内1式期の敷石住居跡が各1軒検出されている(第5図)。いずれも重複や地山への掘り込みが浅いため形状の把握は難しいが、炉を中心とした部分敷石である。概型遺跡ではこの時期、複式炉から石囲い炉に代わる時期で、30軒を超える住居が調査区中央から北西に多く検出されているが、掘り込みが浅いため炉跡のみの検出でプラン等が不明瞭なものが少なくない。時期は中期末～後期前葉であることは間違えず、さらに時期を限定するのは難しいものの、敷石住居が継続集落内に一時期1軒あったようである。大木10式期の SI-62 は概型型土器埋設複式炉の周囲に拳大の円礫を敷いており、この時期の住居の中では最も南東に位置する。これとほぼ同じ時期と考えられる柄鏡形住居が、谷を挟んで200mほど東のF区から1軒(SI-07)検出されている。F区では7軒の堅穴住居跡が検出されているが SI-07 の1軒が最も古い。数基の土坑と後期中葉の堅穴住居にサンドイッチされ残りは良好ではないが、方形の石囲い炉を付設する円形プランの住居で先端が広がる張出部をもつ。壁柱穴が廻り張出連結部には対ビットが確認されている。出土遺物は中期末～後期初頭の微隆起線文の土器の小破片のみで、さらに時期を絞り込むことは難しい。ただ前節で述べたように、この柄鏡形住居は南関東系と考えられるもので、F区でも丘陵の北西緩斜面に立地し、浅い谷を挟んで継続する拠点集落を望める位置にあることは意味深である。

中期末～後期初頭の段階の柄鏡形(敷石)住居は、概型遺跡から那珂川を下って茨城県境に近い茂木町河原台遺跡で1軒検出されている(第4図⑪、中村 1994)。調査面積は1,425m²であるが、この住居以外同時期の遺構は検出されていない。500m南には中期後葉から後期前葉を中心とした塙平遺跡がある(後藤 1994)。道路拡幅部分のみの調査であるが、堅穴住居跡や土坑が多数検出されており、中期後葉から後期前葉の拠点集落と考えられる。壁柱穴で石囲い炉が付設された柄鏡形住居が1軒検出されているが、後期前葉堀之内1式期である(第4図⑫、川原 1995)。河原台遺跡の柄鏡形敷石住居も、前段階から継続する



第5図 柄籠遺跡の敷石住居の変遷と柄籠形住居

拠点集落である塙平遺跡から距離を置いて単独で存在したと予想され、槻沢遺跡と同様な傾向が窺える例かもしれない。

那須烏山市荻ノ平遺跡でも隅丸長方形のプランに張出部を有する柄鏡形敷石住居(Ⅲ区 SI-14)が検出されている(第4図参、津野2007)。周壁に川原石を、北東・北西の奥壁コーナーに板石を配し、中央やや南の張出部側に石囲い炉を有するもので、槻沢遺跡などの炉周辺の敷石とは異なる。道路幅の調査であるが、同じ時期の住居の中では斜面上位の最も東側に位置する。時期は称名寺式新へ堀之内Ⅰ式古段階である。

那珂川上流域は縄文中期末葉～後期前葉の集落が比較的多く存在する地域である。この中には茂木町検の木遺跡や那珂川町三輪町遺跡など石囲い炉を付設する竪穴住居は多数検出されているが、柄鏡形住居・敷石住居が検出されていない遺跡も少なくない(9)。また前述したように、出入口部に埋塞がある住居は三輪町遺跡 SI-034、室ノ木 A 遺跡 SI-1 (木下1993)、塙平遺跡 SI-02、検の木遺跡 A10 住・B14 住居などで認められるものの、正中線に張出部を持つ住居・柄鏡形住居からは検出されていない。

水系は異なるが、鬼怒川流域の宇都宮市古宿遺跡(中期末から後期前葉の敷石住居4軒を含む住居14軒、芹澤1994)、さくら市勝山遺跡(後期前葉の柄鏡形敷石住居が7軒、小竹1995)などでは複数軒の柄鏡形(敷石)住居と配石遺構で構成される集落が検出されている。古宿遺跡については塚本が指摘するように、柄鏡形(敷石)住居の分布の濃い関東北西の山地に近い(塚本2017)ということも考えられるが、配石遺構とセットで構成されていること、中期からの継続集落ではなくこの時期に新たに集落が形成されていることも重視する必要がある。詳細は不明であるが、後期前葉の敷石住居が4軒検出されている大田原市平林真子遺跡もこのような集落であったかもしれない(中木1997)。

那珂川上流域の敷石住居・柄鏡形住居については、継続集落では炉周辺の部分敷石から発展した敷石住居が中期末葉から後期前葉の段階に一時1軒あるもの(槻沢遺跡・ハケットンヤ遺跡)が確認されたが、南関東系譜の柄鏡形(敷石)住居は中期末～後期初頭の初期の段階では前代から続く拠点集落から距離を置いて構築されたと予想される(槻沢遺跡 F 区、河原台遺跡と塙平遺跡)。その後、後期前葉には継続集落内の周縁に位置するもの(荻ノ平遺跡・塙平遺跡・御城田遺跡)、敷石の柄鏡形(敷石)住居、配石遺構を含む新たな集落(平林真子遺跡・勝山遺跡・古宿遺跡)が出現するなど多様であったと考えられる。そして柄鏡形(敷石)住居の受容後もなく後期前葉(堀之内Ⅰ式、綱取Ⅱ式)をもって、那珂川上流域の集落の多くは終焉を迎える。

5. まとめ

これまで槻沢遺跡を中心に栃木県北東部の敷石住居の出現と柄鏡形住居の受容について検討を行ってきた。その結果、住居の中軸線上に張出部をもつものは加曾利 EⅡ式新へ EⅢ式段階に複式炉住居を中心に認められるものの、中期末葉にはほとんど認められないことなどから、後期初頭以降の柄鏡形(敷石)住居は別系統の南関東系譜の住居と考えられるとした。また、住居床面の敷石については炉を中心としたものが多く、壁際まで及ぶものがないことから、複式炉作り替えに伴うものも含め炉の周囲の敷石や石列などから発展したもので、後期初頭以降の柄鏡形の敷石住居は別系統のものとした。これらは、筆者や鈴鹿氏のこれまでの見解をほぼ追認するものとなった。

福島県の状況についてみると、中通りの三春町越和田遺跡では、中期末葉の複式炉住居から後期初頭の石囲い炉住居、後期前葉の敷石住居へとといった集落の段階的変遷が読み取れ、後期初頭の石囲い炉住居には入り口ピットや埋塞が検出されるものが多いという特徴がみられる(福島1996)。また、本宮市高木遺跡でも、中期後葉から続く複式炉住居から後期初頭には石囲い炉住居と部分敷石・柄鏡形の敷石住居で構成され、後期前葉には大型の柄鏡形敷石住居のみの集落になるといった、概ね越和田遺跡と同様な変遷が

窺える(大原 2003)。両遺跡とも大木式土器から加曾利 E 系の土器へ変わる時期に、複式炉住居から石囲いが住居・柄鏡形住居へ変わっており、大きな画期としてとらえられる。一方、福島県北東部の集落内の敷石住居のあり方については、浜通り北部の敷石住居には複式炉を中心に床面の大半に敷石を施すものと、炉の周囲及び奥壁際に部分的な敷石を施すものの 2 形態があり、前者は一般的な集落から離れた見晴らしの良い場所に単独で立地する傾向が、後者は一般的な住居とともに集落を構成する傾向があることが指摘されている(笠井 2006)。中通りでは複式炉敷石住居が、福島県北東部では柄鏡形敷石住居が認められないことも関係するが、両地域の集落での敷石住居のあり方も異なるようである。

栃木県北東部の炉を中心とした敷石住居、初期の柄鏡形(敷石)住居の受容については福島県北東部と近似し、良好な資料はないが本格的柄鏡形(敷石)住居の受容については、中通りと似た傾向が予想される。しかし、栃木県北東部では現在のところ、越田和遺跡や高木遺跡のような一遺跡で複式炉住居から敷石住居への変遷がたどれるような遺跡は確認されていない。なお、いずれの地域も後期前葉をもって集落の終焉を迎える遺跡が多いことは意味深である¹⁰⁾。

槻沢遺跡では中期後葉大木 9 式後半段階に住居正中線の張出部や床面の部分敷石や石列がみられるが、中部高地から関東地方南西部でも加曾利 E Ⅲ式期に小張出部を持つ住居(潮見台型住居)や部分敷石が確認されている。張出部については形態や埋没の有無、部分敷石については炉周辺と奥壁部・張出部などの差異は認められるものの、両地域で張出部や敷石という情報は共有されていた可能性は高い。東北部の複式炉文化圏については、山本氏が指摘するように、床面敷石は受容したものの住居正中線上の張出部については否定されたのかもしれない。栃木県北東部では中期後半以降、中部から関東地方南西部に系譜が求められる連瓦土器・曾利式系土器・両耳壺形土器・有孔罍付土器・石棒・丸石・立石・住居内埋壺・倒置深鉢など多くの遺構・遺物が出土していることはこれまで何度も指摘してきた(後藤 2017)。福島県中通りをはじめとする東北地方南部でも同様の遺構・遺物が出土しており、栃木県北東部を介した受容が推察される。これらの受容形態はさまざまであるが、柄鏡形(敷石)住居については、時間的に両耳壺形土器・石棒などが同様の受容を示すものと考えられる。

最後に、栃木県北東部の敷石住居の発掘調査例はまだ少なく、発掘調査された遺跡でも部分的なもので集落全体の様子がわかるものはほとんどないのが現状である。今後、発掘調査によって新たな展開も十分予想されるが、現段階での私見を記してきた。先学のご批判・ご叱正を賜れば幸いです。

【註】

註1 複式炉分布圏の南縁である栃木県北東部の土器埋設複式炉は、東北部を中心に分布する大規模で石が精緻に組まれた上原型複式炉の影響下で成立したと考えられていた。筆者は平成3～5年の槻沢遺跡の発掘調査で出現期の複式炉が東北部とほぼ同じ形態であること、土器をはじめ遺物・遺構に南からの影響が認められるものがそれ以前に比べ多いことなどから、北を意識しながらも前段階の地元の土器埋設石囲い炉から発展した栃木県北部の地域色豊かな複式炉であることを指摘し(後藤 2005b)、胴部下半を欠くキャリバー形の加曾利 E 系の土器を埋設土器に用いるものが多いことから「加曾利 E の複式炉」と呼称した(後藤 2010a)。その後、阿部昭典はこのような特徴を有する複式炉を「槻沢型複式炉」と提唱しており(阿部 2012)、筆者も遺跡名を冠することについては基本的に同意する。しかし、ほぼ同時期に埋設土器を持たない同型の特徴を有する複式炉が槻沢遺跡のほか、那須塩原市井口遺跡(近江屋 2002)・同市草刈道下遺跡(長山 2013)・大田原市片岡田富士山遺跡(水野他 2012)・那須町ハクケトンヤ遺跡(後藤 2007a)、日光市仲内遺跡(片根 2012)などで出土しており、上原型複式炉最盛期の福島県への広がりは管見では郡山市びわ首沢遺跡(金崎 1980)で 1 例あるのみで希薄なようである。このような石組複式炉については、大木 9 式中段階に福島県浜通りから中通りで散見される石囲部・石組部・前底部で構成される上田型複式炉との関係が考えられ、槻沢遺跡でも遺存状態は良くないが同型と考えられる複式炉が 1 例(SI-71)確認されてい

- る。那須地方のものは上田郷型複式炉より若干新しい大木9式新段階のものが多く、A字形や先端がやや窄まる長方形で奥室に石を敷かないものから、前室よりやや深い小型の奥室に石を敷いたものへの変遷が想定される(後藤2007b)。このようなことから、栃木県北部に特徴的な土器埋設複式炉を「櫛形土器埋設複式炉」、土器を埋設しない石組複式炉を「櫛形石組複式炉」とし、両者を総称して「櫛形複式炉」とすることを提唱したい。
- 註2 東北地方南部との関連を考えるには、本県のほかに茨城県も視野に入れなければならないが、茨城県では櫛形住居は確認されているものの、管見では敷石住居は確認されていない。福島県では敷石住居、中通り・会津地方で多く検出されているが、浜通り地方では南相馬市小高区より南では確認されていない。このことから、両地方の敷石住居の関連については栃木県及び新潟県の状況を把握することが重要と考えている。
- 註3 筆者も概ね支持するが、栃木県北東部から福島県南部の中期から継続する拠点集落は堀之内1式、鋼取2式をもって終息するものが多いと考えている。これ以降も継続が考えられる遺跡でも地点を変え、規模が極端に小さくなるものが少なくない。これは、中期中葉阿玉台式期から数型式にわたって存続した拠点集落の崩壊・分散であり、栃木県北東部の中期縄文社会の終焉として位置付けられる。敷石住居や櫛形住居もこの時期に対応し、このような変革の中で考えていく必要があろう。なお、栃木県の縄文時代の時期区分については、早期前平徳系土器群の段階、前期中葉、中期前葉、後期中葉、晩期後半の各段階に大きな画期があり、この時期の前後で遺跡立地が変わり、集落の断絶がみられるものが多いという指摘をしたことがある(後藤2000)。
- 註4 以下、櫛形遺跡の住居については昭和52年調査のものはS 52-●H、平成3～5年度調査のものはSI-●と表記する。
- 註5 SI-74についても、北側が削平され、南側も土坑との重複が著しくわかりにくい、ほぼ同じ時期の石組部と前庭部からなる石組複式炉の住居である。前庭部にかかる半円形状の掘り込みを土坑の重複として報告したが、土坑底面と前庭部のレベルが同じであることを考えると、U字状の掘り込みである可能性が高い。
- 註6 那須地方の土器埋設複式炉は東北部のものに比べ小形のものが多く、埋設土器は胴部下半を欠いた口径25～30cmのキャリパー形の深鉢を使用するものが少なくない。本住居跡の埋設土器は大木9式土器であるが、口径39cm、胴部最大径53cmで、那須地方の複式炉の埋設土器には規格外の大きさであることから不適であったと考えられる。胴部上半に最大径を有し口縁部で止まる器形であることから、胴部下半を欠いて逆位に埋設することでキャリパー形の埋設土器と同様の形態となる。複式炉の分布の中心地域の大木式土器でありながら、複式炉の埋設土器に使用されなかった稀有な例である。埋設土器や炉床に敷く土器片など材材として使用する土器は再利用品であり、土器型式よりも大きさ、形を優先することは以前にも指摘した(後藤2017)。
- 註7 壁が黒色土で確認面がローム面の場合、溝として報告されているものもある。横穴の掘り込みは前庭部底面の高さとほぼ同じで、先端が低くなるよう若干斜めに掘っているものも少なくない。
- 註8 敷石ではないが、中期後葉にみられる櫛形遺跡SI-02のような住居中央から炉周囲の焼土床も、床に施す行為として敷石の出現に関連するかもしれない。
- 註9 三輪神町遺跡調査15号住居はこの時期の住居としては最も東に位置する。壁柱穴が巡る櫛形住居とされているが、炉がなく掘り込みも溝とピットが片方のみで不明瞭であることから、ここでは保留とする。
- 註10 阿武隈川の自然堤防上に立地する高木遺跡は、阿武隈川の氾濫により集落が終焉を迎えている。ほぼ同じ時期に本県及び東北部多くの遺跡が集落の終焉が認められており、大規模な自然災害が一因として考えられるかもしれない。

【参考文献】

- 青木健二 1981 『芳賀高根沢工業団地内地上の原遺跡発掘調査報告書』 栃木県企業局
 新井 潔 1997 『三輪神町遺跡』(『宇都宮市埋蔵文化財報告書』第11冊) 小川町教育委員会
 阿部昭典 2012 『東北から見る那須地域の縄文中・後期文化』『栃木県立なす風土記の丘資料館第20回特別展図録 那須の縄文社会が変わるころ—縄文時代中期から後期へ—』 栃木県教育委員会
 石井 寛 1998 『櫛形住居・敷石住居の成立と展開に関する一考察』『縄文時代』第9号 縄文時代文化研究会

- 江原 英 2016 『横倉遺跡・横倉戸館古墳群』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 383 集) 栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財団
- 近江屋成陽他 2002 『井口遺跡発掘調査報告書』 西那須野町
- 海老原郁雄 1979 『石関(彦左エ文山)遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 25 集) 栃木県教育委員会
- 海老原郁雄 1980 『槻沢(つきのきざわ)遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 34 集) 栃木県教育委員会
- 海老原郁雄・永岡弘幸 2016 『北関東・堀之内期の柄鏡形住居』『唐澤考古』第 35 号 唐澤考古会
- 海老原郁雄 1999 『南いわき幹線・矢板管内地点発掘調査報告書Ⅱ・広表遺跡』(『矢板市埋蔵文化財調査報告』第 4 集) 矢板市教育委員会
- 海老原郁雄・中木太 2002 『長者ヶ平遺跡発掘調査報告書』 大田原市教育委員会
- 大河原勉 2003 『阿武隈川築堤遺跡発掘調査報告書 3 高木・北ノ脇遺跡』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興財団
- 大田 圭 2019 『縄文時代の栃木県における竪穴住居数の動向とその背景—諸文化要素からみる北関東における縄文時代中期/後期移行期の一様相—』『東京大学考古学研究室研究紀要』第 32 号 東京大学考古学研究室
- 笠井宗古 2006 『熊平 B 遺跡』『常磐自動車道遺跡調査報告』43 福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興財団
- 片根義幸 2006 『柵内遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 296 集) 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団
- 片根義幸 2012 『柵内遺跡』2 (『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 349 集) 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ未来づくり財団
- 金崎佳生他 1980 『びわ首沢遺跡』 郡山市教育委員会
- 川原由典他 1990 『井口遺跡』『栃木県埋蔵文化財保護行政年報(平成元年度)』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 113 集) 栃木県教育委員会
- 川原由典他 1995 『塚平遺跡』Ⅱ (『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 163 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 木下 実 1993 『室ノ木 A 遺跡』 南那須町教育委員会
- 小竹弘明他 1995 『堂原・勝山城』 氏家町教育委員会
- 後藤信祐・谷中隆 1994 『塚平遺跡』Ⅰ (『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 144 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 1995 『槻沢遺跡』Ⅱ (『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 164 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 1996 『槻沢遺跡』Ⅲ (『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 171 集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 2000 『第二編 原始古代 第二章 縄文時代』『高根沢町史』通史編 1 高根沢町史編さん委員会
- 後藤信祐 2001 『槻沢遺跡における竪穴住居建て替えに関する覚書—竪穴住居建て替えに伴う炉の作り替えパターン—』『研究紀要』第 13 号 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 2005a 『堂ヶ原遺跡の複式炉の再検討—栃木県における複式炉の終焉—』『研究紀要』第 9 号 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 2005b 『栃木県における複式炉の様相』『日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集』 同大会実行委員会
- 後藤信祐 2007a 『ハケットンヤ遺跡』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第 302 集) 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団
- 後藤信祐 2007b 『那須町向山神社遺跡の石組複式炉の再評価』『栃木県考古学会誌』第 28 集 栃木県考古学会
- 後藤信祐 2009a 『栃木県における中期後半～後期前半の「埋裏」の様相』『野州考古学論叢—中村紀男先生追悼論集—』 同論集刊行会

- 後藤信祐 2009b 「堂ヶ原遺跡出土の両耳壺について」『H isutory & Culture 氏家の歴史と文化』第8号 氏家歴史文化研究会
- 後藤信祐 2010a 「加曾利Eの複式炉・大木の複式炉—掘り方と埋設土器からみた複式炉の検討—」『研究紀要』第18号 (公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 2010b 「那須の縄文時代—袋状土坑・複式炉・配石と土器棺墓のころ—」『ブックレット 那須をとらえる』1 術随想舎
- 後藤信祐 2017 「栃木県における曾利式系土器の様相」『研究紀要』第25号 (公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 眞保昌弘 1998 「三輪神町遺跡(第8次調査)」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 20平成8年度(1996)』 栃木県教育委員会
- 鈴鹿良一 1986 「複式炉と敷石住居」『福島の研究』第1巻 地質考古篇 清文堂出版株式会社
- 芹澤清八 1985～1987 「御城田遺跡」(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第68集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 芹澤清八 1994 「古宿遺跡」(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第142集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 塚原孝一 1994 「三輪神町遺跡」(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第143集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 塚本師也 1997 「浄法寺遺跡」(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第196集) 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 塚本師也 2007 「第4章 縄文時代 第4節 遺構研究 1.建物跡」『研究紀要』第15号 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 塚本師也 2018 「栃木県における柄鏡形(敷石)住居の受容と背景」『国史学』第223号 国史学会
- 津野 仁 2007 「荻ノ平遺跡」(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第270集) 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団
- 中木 太 1997 「大田原市平林真子遺跡の敷石住居について」『那須文化研究』9 那須文化研究会
- 中村信博 2005 「松の木遺跡」1 本田技研工業株式会社松の木遺跡調査団
- 中村紀男他 1994 「河原台」(『茂木町埋蔵文化財調査報告書』第1集) 茂木町教育委員会
- 長山明弘 2013 「那須塩原市草刈道下遺跡の複式炉と土器—「下野國那須郡石林の發見物」の再吟味—」『型式論の実践的研究 1—地域編年研究の広域展開を目指して—』(『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』第251集) 柳澤清一 編
- 福島雅儀他 1996 「越田和遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』8 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 福島雅儀 2012 「阿武隈川上流域における縄文中期から後期への集落変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第172集 国立歴史民俗博物館
- 本橋恵美子 2017 「縄文時代における柄鏡形住居址の再検討」『山本暉久先生古稀記念論集 二十一世紀の考古学の現在』株式会社六一書房
- 水野順敏・新井 潔 2012 「片府田富士山遺跡」(『大田原市埋蔵文化財調査報告』第1集) 大田原市教育委員会
- 三春町教育委員会 1989 「シンボジウム縄文の配石と集落—三春町西方前遺跡と樂原A遺跡の問題点— 討議集」
- 山本暉久 2000 「外縁部の柄鏡形(敷石)住居」『縄文時代』第11号 縄文時代文化研究会
- 山本暉久 2002 「敷石住居址の研究」六一書房
- 山本暉久 2012 「縄文時代社会の変質—関東・中部地方からみた縄文時代中期から後期へ—」『栃木県立なす風土記の丘資料館第20回特別展図録 那須の縄文社会が変わるころ—縄文時代中期から後期へ—』 栃木県教育委員会

研究紀要 第28号

発行 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化センター

〒329-0418

栃木県下野市紫 474 番地

TEL 0285 (44) 8441 (代表)

FAX 0285 (43) 1972

HP : <http://www.maibun.or.jp>

発行日 令和2年3月30日発行

印刷 株式会社大塚カラー
